

神奈川の大学博物館・美術館等の紹介

明治大学平和教育登戸研究所資料館

明治大学生田キャンパスは、旧日本陸軍の登戸研究所の跡地に立地している。登戸研究所は、陸軍の秘密戦（スパイ活動など）のための兵器・資材を研究・開発する機関であった。登戸研究所時代の建物を保存・活用して展示スペースとし、戦争の裏側で展開されていた秘密戦の実態について、ありのままに現代に伝えようという資料館である。

1 博物館の沿革

1980年代に川崎市民の中で登戸研究所遺跡の保存運動が生まれ、登戸研究所関係者への聞き取り調査などが行われ、登戸研究所の実態解明が進んだ。川崎市民・研究所勤務者が遺跡の保存と資料館建設を明治大学に働きかけ、大学は平和教育・科学教育発信の拠点として位置付けて、研究所時代の建物1棟を保存・活用して、2010（平成22）年3月に資料館を設立した。

2 博物館の特色

登戸研究所は、1937（昭和12）年に電波兵器の実験場として生田の地に開設され、日中戦争の泥沼化に対応するために、1939（昭和14）年に総合的な秘密戦研究機関として再編拡充された。

本資料館には5つの展示室がある。第1展示室では、ジオラマや航空写真などのパネル展示で登戸研究所設立の目的や組織の構成を示し、秘密のベールに包まれた研究所の全体像を明らかにしている。

第2展示室では、登戸研究所で開発された代表的兵器である「ふ号」＝「風船爆弾」

（アメリカ本土攻撃のための気球）と電波兵器「く号」（電磁波で人員を殺傷しようとする兵器）などを模型や写真で示している。



第3展示室では、スパイが使用する毒物・薬物・時限爆弾・放火道具、相手国の食糧生産に打撃を与えるため穀物を枯らしたり、家畜を殺傷したりする細菌兵器などについて展示している。

第4展示室では、大戦中に大規模に実施された中国（蒋介石政権）紙幣の偽造とその撒布作戦について、当時製造された実物の偽札も交えて展示している。

第5展示室では、大戦末期、「本土決戦」に備えて、登戸研究所は長野県を中心とした地域に分散移転する。研究所本部とゲリラ戦のための兵器を製造する部門が移転した長野県伊那地方に残された遺跡・遺物について展示している。

3 地域文化との関わり

資料館は、大学にとって平和教育・科学教育の発信地であると同時に川崎市民の方々との地域連携の場であると位置付けられており、毎年企画展・講演会などを通じて連携・協力を深めている。

4 ご利用案内

・開館時間 10:00～16:00

・休館日 日・月・火

・入館料 無料

・問合せ先

HP：<https://www.meiji.ac.jp/noborito/>

電話：044-934-7993

・交通アクセス 小田急線「生田駅」南口から新宿方向に徒歩約12分、あるいは小田急線「向ヶ丘遊園駅」北口から小田急バス「明大正門前」行で20分、終点下車。